

---

# 魔法少女リリカルなのは StrikerS 未来に思いを馳せて

天海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers 未来に思いを馳せて

### 【Nコード】

N0181BA

### 【作者名】

天海

### 【あらすじ】

小学校3年生のなのはは悩んでいた。

「将来、私は何になりたいんだろう……」

勉強はまあまあ、運動はダメ。

これといって特技もない。やりたいこともない。

何もできない、そんなやりきれない気持ちを抱えたまま、学校生活を送っていた。

だが、ある日、なのはは未来にタイムスリップしたのだった。

## はじめに(前書き)

この話はフィクションです。

今から私が話すことは、私にとっても信じ難いこと。

このことを、  
なのはから聞いたのは、  
11年前。

真実とわかったのは1年前。

あの時は、本当に驚きました。

信じられないような、でも本当の話をこれからします。



……え？  
私？

はじめまして。

私の名前は、フェイト・T・ハラオウンです。

管理局の局員で執務官をやっています。

凶悪事件などを担当しています。

あ、なのはというのは、私の幼馴染で大親友の高町なのは。

なのはも管理局の局員で、階級は一等空尉。

彼女は今回のJ・S事件の功績で、昇進の話があったのに、それを断って……ま、まあ、それはいいとして

それでは、

魔法少女リリカルなのは S t r i k e s 未来に思いを馳せて  
始  
まります。

## 第一話 なのはの話

|||||

フェイトside

時をさかのぼり、私達が9歳の頃、約11年前に戻る。

A's編で起こった、闇の書事件が終息し、なのはと私は、休暇中で冬休みの最中だ。

季節は冬。二人きりでコタツに入り、みかんを食べ、まったりしている。

「静かだね」

「お正月だからねえ。フェイトちゃんは準備万全？」

「うん、2泊の旅だよね」

高町家、月村家、パニングス家、ハラオウン家の4家族合同で今夜から、温泉旅行に行く。

旅行の話が一段落すると、私はなのはに聞いた。

「そういえば、なのははユーノと初めて会った時、魔法にも出会ったんだよね？」

「あー、うん…そうだね」

「たった半年ぐらいで、そんなに強くなるなんてすごいよなって、今更だけど思ったよ」

「うん……」

なのはは急に歯切りが悪くなった。

「？」

その様子を見て、不思議に思う私。

「あのね、実は……」



## 第二話 物語のはじまり

時は無印編の一話に戻る。

今日、なのはがユーノと出会ったはずの日となった。



そう  
はず  
だったんだ。

今日は、  
わたしは学校にあっ  
たので登校してい  
た。

授業の一つの総合学習で、将来の職業についての話を先生がしたのだ。

その話を聞きながら、なのはは考えていた。

(わたしは何になりたいんだろう……)

家の翠屋を継ぐという選択肢もあることはある。

翠屋というのは、喫茶店で結構人気だ。

けど、やりたいことかと言われるとよくわからない。

将来のことを考えていないのは、自分だけではないだろうか。

昼休み

屋上でベンチに座り、弁当を食べながら、親友のアリサとすずかにその話をする。

「わたしは、お父さんとお母さんが会社経営だからいっぱい勉強

して、ちゃんと後を継がなきゃって程度だけど？」

アリサの両親は、大きい会社を経営していて、お金持ち。

「わたしは、機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなって」

すずかは大人しい性格だけど、運動神経抜群だ。すずかの家もお金持ち。

この二人の家はすごく大きい。

「でも、こんなの、考えていないのと大して変わらないわよ」

「そつだよなのはちゃん。考える時間はいっぱいあるんだし」

二人がフォローしてくれるが、まだ気分は晴れない。

「でも…わたし、特技も取り柄もない」「ばかちんっ！」「きゃー!？」

アリサが急に怒鳴った。

「自分からそういってしまうんじゃないの!」

「そうだよ。なのはちゃんにしかできないこと、きっとあるよ」

慰めてくれるすずか。

「それに!」

アリスはなのはを指差す。

「アンタ、理数の成績はこのわたしよりいいじゃないの! それで取り柄がないとは、どの口が言うわけ!」

と、アリスはなのはの両頬をぐいぐい引っ張りだした。

「にゃ〜! だ、だって、文系苦手だし、体育も苦手だし!」

「あ、あの、二人ともダメだよ」

すずかが止めに入る。

こんな、落ち着きがないけど、平穏な日々が続いていた。

第三話 未来へ……

アリスがようやくなのはの頬を引っ張ることをやめた。

「そろそろ、お昼休みおわりね」

「そうだね、教室に戻ろうか」

「うん。……あれ？ これ、なんだろう？」

弁当を食べていたベンチから立ち上がると、ベンチの側に何か落ちていたのを、なのはが気付いた。

それは、くし形で蒼の宝石のようなものだった。

なのははそれを手に取ると……

ピカッ！！

急に、明るい光に包まれた。

「きゃ！？ な、何っ！？」

なのはは、まぶしくて腕で押さえながら目を閉じた。

しばらくして、光が収まった感じがして、目を開ける。

すると……………

「JJJJ……JJJJ……？」

そこは、学校の屋上ではなく、まったく別の場所だった……。





既にここは、学校の屋上ではなかった。

周りを見ると、見たこともない建物が建っている。

そう、えもんで言う、22世紀にあるような建物だ。

地面は草原。

空には、流れる雲の隙間から二つの惑星が見える。

ここは地球ではなさそうだ。

「夢……なのかな……？」

思考を働かせる。……が、意識ははっきりしているから、夢ではないみたい。

「うーん。宝石は……あれ！ 宝石がなくなってる！」

さっきまでなのはが持っていた蒼い宝石が、なくなっていた。



「ふえ？」

オレンジ髪の女性に話しかけられた。

ティアナ side

私は、ティアナ・ランスター二等陸士。16歳。

今日も、朝練で訓練所に行くところだ。

朝練開始まで、十五分前。普通に歩いてても余裕ね。

ちなみに同部屋のスバルは、何度起こしても起きないから置いてきた。

どうせ、後からついて来るでしょ。

スバル・ナカジマ二等陸士。15歳。

訓練所校から、ずっと一緒のコンビで、腐れ縁だ。  
コイツのおかげで、私の苦難と苦労の日々が始まったんだけど。

「ん？ 誰だろ、あの子……」

隊舎から出ると、見慣れない女の子がいた。

たぶん、エリオやキャロぐらいの歳の子だ。

よく見ると、オロオロしている感じだ。

（普通の一般人は、管理局の施設に入れないはずだけど……迷ったのかな？）

そう思い、女の子に話しかけた。

「どうかしたの？ 大丈夫？」

「ふえ？」

女の子は驚いた顔でこちらを見る。

私は女の子と目線を合わせ、出来るだけ、優しい声で話す。

「どうしたのかな？ 家の人とはくれたの？」

もしかしたら、六課の誰かの親戚の子かも。

「え……えっと、ここは、どこですか？」

「ここは、管理局 機動六課よ」

「か、かんりきよく？ きどつろつか？ ってなんですか……？」

ん？ 管理局を知らない……？ え、なに？ どういうこと……？

「ティア〜！ 待ってよ〜！」

寮の方から、自分の名前を呼ぶ声がした。

言わずもがな、スバルだ。

「はあ、はあ。置いていくなんてドブイよ!」

「アンタが起きないからでしょうがっ!」

「ーゴッ!」

スバルの頭に拳を落とした。

「いたーい……」

「あ、あの……」

「え? 君は誰?」

スバルが、ようやく女の子の存在に気づく。

「あ、そういえば、名前を聞いてなかったわね。  
私はディアナ・ランスターよ」

「私、スバル・ナカジマだよ」

「わ、わたし、高町なのはです……」

おずおずと、女の子が答えた。って……

「わっ、なのはさんと同姓同名なんだ!」

スバルが驚きの声を上げる。そりゃ、私もびっくりしたけど。

「なのはさん?」

なのはが、首を傾げる。

「うん、私たちの上司だよ」

「そう言われてみれば、なのはさんになんとか似てるわね……」

なのはさんの親戚かな?



「あ、確かに」。

……それよりもディア、時間大丈夫？」

……………へっ？

「げっ！ ヤバッ！ 訓練開始まで三分しかないじゃない！ 急ぐわよー！」

私は走り出した。

「うん！ えーと、なのは………ちゃんていいかな？ なのはさんは、訓練所にいるから一緒に行く？」

「は、はい……」

ティアナside 終了

## 第五話 出会うはずのなかった二人

第五話 出会うはずのなかった二人  
なのはは、スバルに手を引かれ、その”なのはさん”という人がいる訓練所へ走る。

どんな人かな？……って考えている暇はなく……！

「はーっ、はーっ！……ちよっ、ちよっと待ってください……！」

運動音痴で体力もないわたしは、すぐに息切れしてしまった。

「あー、ごめん。速すぎた？ でも、もうちよっだから頑張っ  
て！」

スバルにそう言われる。そんな無責任な……

もう限界と思った時、ティアナとスバルは急に立ち止まった。

どっちら着いたようだ。

「遅れてすみません！」

(大人の)なのはside

スバルとティアナが遅れてやってきた。エリオとキャロはとっくにきているのに。

それを咎めようとする、スバルが女の子の手を引いているのが目  
がいく。

「スバル、その子は？」

「えっ？　なのはさんの親戚じゃ……？」

「ハ―……ハ―……」

かなり息切れしているのか、手を膝に付いている。

しばらくして、顔を上げた。

すると……

私が普通っていた、聖祥小学校の制服を着ている

栗色の髪で

その髪は私と同じ白いリボンでポニーになっていて

顔立ちも私そっくりの

11年前の

私がいた。

(大人の)なのはside終了



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0181ba/>

---

魔法少女リリカルなのは StrikerS 未来に思いを馳せて

2012年1月6日01時47分発行